

フィリピンのサリサリストア

現地に密着した店舗が雇用と消費の場を生んでいる。

立命館大学 政策科学部
准教授 舟橋豊子

筆者は2011年からフィリピンのルソン島、サマル島、レイテ島、パナイ島にある250店舗余りのサリサリストア(sari-sari store/tindahan bayan)を訪問して、仕入れや販売方法等の聞き取り調査を行ってきた。今、世界的にCOVID-19が蔓延^{まんえん}している中、調査で出会った方々が無事であることを願わずにはられない。

フィリピンは大小様々の7109の島々からなり、面積は29万9404平方キロメートル(日本国土の約80%)、人口は2015年8月の国勢調査によると約1億100万人である。富裕層が住む地域や都市スラム、山岳地帯、農漁村と多様な特徴をもっている。

フィリピン1世帯あたりの年間所得(全国/2015年)は平均18.9万ペソ(約40万円)で、1万ペソ(約2万円)未満の世帯が5.3%ある(フィリピン統計局)。マニラ首都圏に人口が過度に集中している一方で、農漁村では過疎化が進み経済格差もみられる。このようなフィリピ

ンにおいて、生活物資を現地の人々、特に農漁村や都市スラムの人々はどのようにして得ているのだろうか。

少量でもツケでも買える店

本稿では、フィリピンで最も人々が親近感を感じている小売店について紹介していこう。

「サリサリストア」はフィリピンで食料品から日用品まで多様な商品を取り扱う雑貨屋の総称であり、いわゆる近所のパパママストアである。12世紀に中国との交易を経てフィリピン国内に広がったと言われる。塩、砂糖などの調味料はグラム単位で、洗剤は1回分の少量パック、キャンディーは1個、タバコは1本から買い求めることができる。必要な量だけ買い求められて店舗によってはツケ払いも可能なため、収入に関わらず多くの人々が必要な商品を手に入れることができる。

店主の住居と店舗を兼ねていることが多く、大きな鉄格子付きの窓を介して店外の顧客に商品を販売する。店舗サイズは2メートル×4メートル程度であり、陳列棚や貯蔵庫、作業所も兼ねている。休憩所や食堂をもつ店舗もある。

サリサリストアはスーパーマーケットなどの10%増し程度の価格で「バラ売り」「量り売り」をする。雑誌などの「貸し出し」をする店舗もある。最近ではWi-Fiスポットや銀行の金融商品を提供する店舗もある。携帯電話の通信用SIMカード販売や携帯電話機の充電、通信料金



パナイ島バコルドのサリサリストア